

現役保育士における「保育士イメージ」について

柴田 長生

1 はじめに

本研究の目的は、保育現場で活躍する保育士の視点から、保育士の専門性や現場保育士の持つアイデンティティに関する考察を試みることである。現役保育士から「保育士（あるいは保育士職）に関する、自らが思い描くイメージ」を調査し、回答内容や経験年数による回答内容の変化などを分析した。

保育士^注の専門性に関する研究は、全国保育士養成協議会の「保育者の専門性についての調査」（2013,2014）をはじめ、数多くの先行研究が存在する。小笠原他（2017）によれば、「CiNii Articles」を用いた検索で413件の文献をヒットし、保育士の専門性に関する論文の数は、2010年頃から急速に増加しているという。

例えば季刊誌『発達』134号（秋田他，2013）では、「これからの保育者の専門性」という特集が生まれ、「総論 保育者の専門性の探究」（秋田，2013）、「子どもが自ら遊ぶ中で育つこと」から見る保育者の専門性」（戸田，2013）、「保育環境の中に見る保育者の専門性」（上田，2013）、「地域の子育て支援・保護者支援の専門性」（天野，2013）、「人事交流教員からみる保育者の専門性」（廣内，2013）、「保育者の専門

性を高める園内研修」（中坪，2013）、「保育者を支援するネットワーク」（片山，2013）、「保育者の専門性とライフコース」（野口，2013）などが掲載されている。このタイトルを見る限りにおいても、多面的な観点から保育士の専門性に関する認識・検討が必要とされていることがうかがわれる。

本特集の编者である秋田（2013）は、上記特集の総論の中で、保育士の専門性に関する探究についての今日的な意義について、以下のように述べている。

- ・保育者の専門性については、「保育所保育指針」「幼稚園教育要領総則」の中で謳われているが、専門職としての保育者に関する社会内での認識は低い。
- ・保育者の専門性の明確化は、「少子化社会の中で、子どもたちのよりよい育ちを保証する質的向上につながる」。
- ・保育の場では、「保護者や社会からの多様なニーズに個別に対応することが次々求められている」。そのため、保育者の専門性を高めることが求められている。
- ・2015年施行予定の「子ども・子育て新制度」が動き出している中で、保育者における専門性の確立が現在問われている。

注 本論は保育所での調査結果に基づいているので、本論では保育所保育に携わる者を「保育士」と記述するが、幼稚園教諭を含めて保育に携わる者を「保育者」と記述するのが一般的であろう。引用文献の中で原著者が「保育者」という用語を用いている場合には、関連箇所の記述に際して「保育者」という用語を用いて区分した。

しかし小笠原他（2017）は、保育士の専門性に関する研究が増加する一方で、それらの多くが保育研究者や保育士養成校の教員による研究であり、「保育現場からみるとどことなく現場の実態にそぐわない」と指摘している。具体的には、「研究者の立場から俯瞰的に捉えた「専門性」になりやすい」「保育士の専門性」を質問紙等で尋ねる研究では、保育所保育指針の内容や養成校のカリキュラムの内容から「保育士の専門性」を特定、質問項目化し、それらを保育士に尋ねて数量化しようと試みた研究が多い（全国保育士養成協議会，2013など）」「そうして項目化した専門性の内容は、いずれも抽象的な事項であることが多く、回答する保育士としては具体的な保育場面に照らし合わせて考えることが困難なことが多い」と述べている。保育現場からの専門性に関する研究方法として、「保育士の専門性とは何か」についての、ベテランの保育士と新任の保育士の違いなどの自由記述内容の分析などを研究方法としている。

また神長（2015）は、保育者の専門性についての議論を重ねながらもその議論が深まらない、あるいは保育者の専門性についての理解が広がらないもどかしさを指摘し、社会からの保育に対する養成や期待、及び保育者がかかえている今日的課題を踏まえながら、保育における「専門家像」について論述している。

秋田（2013）が指摘する内容について、現役保育士の中ではもちろん了解されている事柄だろうと思われる。そして保育士の専門性形成については、保育士の専門職としての成長過程が保育経験年数と関連づけられて理解され、保育士の成長のための支援や保育士自身のアイデンティティ形成の重要性について繰り返し述べられてきた。

その際に必ず引用されてきたのが、秋田（2000，2001）による Vander Ven（1988）に基

づく「保育者の発達段階モデル」である。発達段階を「実習生・新任の段階」「初任の段階」「洗練された段階」「複雑な経験に対処できる段階」「影響力のある段階」の5つに区分し、それぞれに対して「専門家としての水準」「役割及びはたらき」「キャリア発達の段階」「実践の方向性」という4つの内容に区分して、発達段階モデルを再構成して紹介している。

保育士の成長やそのための支援などについては、森上（2000）などによって繰り返し論述されてきた。そして、その際に指摘されるのが保育士自身のアイデンティティ形成の重要性である。「アイデンティティ（自己同一性）」という用語は、Erikson E.H.（1959）による、各発達段階における「危機状況」とその克服によって発達を遂げるとする発達理論の中で用いられた有名な用語である。秋田（2000，2001）は、「危機と成長」という対比を用いながら、学生時代の「単に子どもがかわいいから」といった段階からベテランの保育者になっていく歩みについて、「保育が内包する三つの困難」ということを具体的な保育実践課題の中から抽出して、それらを乗り切っていくことが保育者としてのたゆみのない「アイデンティティ生成」の道りだと述べている。

しかし、西山（2006）は、「保育者の自我同一性の重要性を指摘する声は多いが、実証的な研究はほとんどない。一方、職業的同一性に関する研究は80年代以降急増しているものの、我が国ではこの領域の研究成果は少なく、保育力量と自我同一性形成を取り上げた研究になると皆無に等しい。」と指摘し、「子どもの社会性を育むことへの保育者効力感」に関して、保育における人間関係領域に特に着目しながら、保育者のアイデンティティ形成と関連づけた研究を行っている。また神長（2015）は、保育者養成カリキュラムにおける保育へのアイデンティ

ティに関する研究の少なさを述べ、アイデンティティ形成のための課題として、「新規採用一年目の危機の乗り越え」「保育者養成と新規採用一年目の時期とのギャップをいかに埋めていくか」「学び続ける保育者を支える園内研修の充実」の3点を指摘している。

このような保育士の専門性や、保育士の成長に関する研究は数多く存在するのであるが、日々の保育実践の中で、それらを担う個々の保育士自身にとって、本当に腑に落ちた内容になっているのであろうか。現場の保育士にとって、到達目標とする保育者像とはどのようなものなのであろうか（保育士としてのアイデンティティの形成）。あるいは小笠原他（2017）がめざす、保育実践現場における専門性に関する研究方法が、保育実践経験の積み重ねの中で形成され、認識された内容の分析・検討をめざすのであれば、そこで形成される保育者像は具体的にどのようなものなのであろうか。それらは、秋田（2013）が総括したような、保育者の専門性の確保・向上の必要性を担保するのであろうか。

2 研究目的

本研究では、あるべき保育士像や保育士の専門性について、保育を構成するために必要な専門領域・専門技術や、現在の保育における多様なニーズや諸課題などに基づいて分析・検討するのではなく（研究者の視点）、現役保育士達が日々の保育実践において、どのような実感を持ちながら何を営んでいるのかという、「現役保育士自身が感じている、保育士に関するイメージ」を質問紙調査により収集し、それらを分析することによって、現役保育士が日々実感している専門領域や保育士としてのアイデンティティについて検討する（保育実践者の視

点）。また、現役保育士としての経験を積み上げることにより、それらがどのように変化してくるのかに着目し、変化過程の中に保育士としての専門性の確立や、専門職としての成長過程、あるいは保育士としてのアイデンティティの形成について検討することを目的とする。

本研究を行うにあたり、考慮した研究前提をまず示しておきたい。

- ① 現役保育士が、自らの職業（あるいは保育士である自分自身）に対して持つアイデンティティが、保育士自身が述べる「保育士に関するイメージ」にそのまま投影されるのではないか。
- ② 保育士自らが形成しているアイデンティティこそが、日々の保育実践のなかで、腑に落ちていること、あるいは自らの保育実践目標（目的）として意識されている具体的内容であろう。
- ③ この内容が、保育現場を構成する保育士の専門的枠組み、及び保育実践基盤である。
- ④ 現役保育士における「保育士イメージ」は、経験年数と共に変化し、その変化過程の中に専門性の深化や、保育士としての成長を見て取ることができる。

3 研究方法

2017年6月に、現役保育士82名（男10名、女71名、性別不明1名）に対して、保育士についてのイメージ調査を行った（表1）。平均経験年数は8.74年（SD=8.41）、中央値は5年であった。経験年数の区分は、秋田（2000,2001）を参考にした。

アンケートの設問内容は以下の通りである。

- ① 性別
- ② 経験年数
- ③ 「保育士（保育士業務・保育士職・保育士

表1 性別経験年数別一覧

経験年数	男	女	不明	合計	
1年～2年	3	14	1	18	22.0%
3年～5年	5	21	0	26	31.7%
6年～10年	0	13	0	13	15.9%
11年以上	2	23	0	25	30.5%
合計	10	71	1	82	100.0%

という存在など)に対する自由なイメージ]について、概ね20～30文字程度までの自由記述。思い浮かぶイメージを5つ記述する。

- ④ ③のイメージについて、自分の中のイメージの強さを10段階評価する。
- ⑤ 記述した5つのイメージについて、1位～5位のランキングを付与する。

個人に関する情報収集は、性別・経験年数のみとし、個人が特定されないよう配慮した。

イメージ分類はKJ法(川喜田, 1967)を用いて実施した。類型の際には、妥当性を高めるために、筆者及び、筆者が所属する大学の非常勤講師(保育実習担当・保育士経験あり)の計2名が、協議して分類した。イメージ集約はThe Card 8(カード型データベースソフト)を使用し、統計処理はExcel統計12を用いて実施した。

4 結果

(1) 保育士イメージの分類

KJ法を用いて保育士イメージに関する自由記述をカテゴライズし、「子どもの受け止め」、「保育」、「保護者」、「保育士」の4つの主カテゴリー(以下主分類と記述)を抽出した。イメージ記述内容をまず56の内容に分類し、分類されたイメージ内容を11の副カテゴリー(以下副分類と記述)に集約し、11の副分類から4つの主分類を導いた。保育士イメージの分類結果と、各内容への回答率及び回答例を示したの

が表2である。また、表2に基づいて、主分類及び副分類の回答比率を示したのが図1である。ひとつの自由記述の中に異なるイメージ内容が含まれる場合は、別個の回答内容として当該分類内容にそれぞれ計上している。

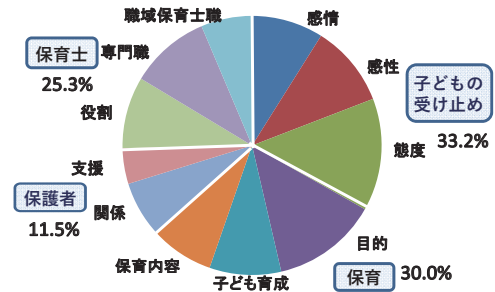


図1 保育士イメージ回答内容の分布

(2) 複数のイメージ内容を含む回答

全回答数405件の内、65件の回答に複数のイメージ内容が含まれていた(16.0%)。含まれるイメージ内容は2つまでであり、3つ以上の内容を含む回答はなかった。複数内容を含む回答の比率を経験年数で見ると、経験年数1～2年が18件/91件(19.8%)、3～5年が21件/127件(16.5%)、6～10年が13件/65件(20.0%)、11年以上が13件/122件(10.7%)であった。

複数内容として組み合わせられたイメージ表現に用いられたイメージ内容は、分類された56のイメージ内容の内、40の内容が使用され、多岐にわたっている。多く用いられたイメージ内容を見ると、「見守る(16件)」「保護者と共に(9件)」「一人一人(7件)」「安心・信頼(7件)」などであった。

複数のイメージ内容を含む回答例を、経験年数区分別に示したのが表3である。

表2 保育士イメージの分類結果（回答人数=82人 全回答数=405件）

主分類	副分類	内容	回答率	回答例
子どもの受け止め	感情	愛情	28.0%	愛情を込めて育む。子どもに愛情を注ぐ。
		愛着	3.7%	子どもの愛着の対象。子どもと愛着関係をもてる。
		子ども好き	11.0%	子どもが好き。子どもが大好き。
		優しい・明るい	8.5%	明るく、優しく、子どもや保護者に接する。いつも笑顔。
	感性	子どもと共に	20.7%	子どもと一緒に遊びを楽しむ。共に成長する。
		子どもへの共感	15.9%	子ども達の思いに共感する。気持ちを受容・共感する。
		子どもから気づく・学ぶ	3.7%	大人も学ぶことができる。一緒に学ぶ。
		身近に感じる	4.9%	成長を日々感じる。身近な存在・近い距離。
		遊び・保育を楽しむ	3.7%	同じ場面を楽しむ。子どものしたい遊びをする。
		子どもへの所感	4.9%	子どもとの出会いを大切に。子どもの成長を喜ぶ。
	態度	子どもを受け止める	4.9%	子どもの気持ちを探り、感じ取ろうと心がける者。
		子ども目線	6.1%	子どもと同じ目線に立って遊びを楽しむ・共感する。
		子ども一番・ありのままに	6.1%	ありのままの姿を受け入れる。子どもの気持ちを一番に。
		寄り添う	11.0%	子どもの気持ち・発達に寄り添う。理解者として寄り添う。
		見守る	23.2%	成長を傍・近くで見守る。親と一緒に成長を見守る。
		一人一人	15.9%	一人一人の発達を知り育む。一人一人と丁寧に。
支える		11.0%	情緒の安定を図る。子どもの声や思いを拾い、上げ、深める。	
肯定的関わり		7.3%	肯定的に子どもと関わる。子どもの主体性を大切に。	
保育	目的	子ども尊重・子ども第一	8.5%	子どもが第一。子どもの成長する力を尊重する。
		安心・信頼	29.3%	子どもにとって安心できる存在。子どもと信頼関係を築く。
		命を守る	17.1%	子どもの命を預かる・守る。安全確保。
		安全	8.5%	安全な環境を確保する。安全に配慮。
	子ども育成	人格・人間基盤の形成	12.2%	人格形成の基盤を作る。自己肯定感の育成を担う。
		自立支援	7.3%	生活をサポート。成長を促す。自力で過ごせるお手伝い。
		子育て援助	12.2%	家庭と協力しながら子育てを援助。成長を助ける。
		生活習慣・生きる力	8.5%	基本的な生活習慣、生きていくために必要な力をつける。
		社会性・友人関係	19.5%	友達との関わりを通して社会性を身につける。集団生活。
		活動保障	3.7%	多様で継続的な体験を保障する役割。
保育内容	しつけ	2.4%	善悪を認識させる。	
	健康管理	4.9%	心と体の健康を理解し守る。体調管理を行う。	
	保育・教育	7.3%	教育・養育の2つの大きな視点を持って関わる。	
	環境作り・環境整備	22.0%	活動が出来る環境を作る。遊びの環境の重要性。	
	遊び・生活の伝承	7.3%	生活知識や、面白い遊びなどの様々な伝承。	
	食育	1.2%	食べることが楽しいと感じられる昼食時の関わり。	
	食育	1.2%	食育	
保護者	関係	安心・信頼	12.2%	保護者にとって、信頼・安心して寄り添える存在。
		相談	8.5%	親の悩みを相談できる存在。身近な相談相手。
		コミュニケーション・聴く	19.5%	親の困り感、嬉しさを親身になって聞く。コミュニケーション。
	支援	保護者支援	8.5%	保護者の育児のサポートをする福祉職。保護者援助。
		保護者育成	9.8%	保護者に対しても愛情を込めて育む（親育て）。
		保護者と共に	7.3%	子どもの成長や発達を保護者と共に喜び合う存在。
保育士	役割	憧れ・モデル	14.6%	子どもが憧れる大人のモデルとなる。
		お手本	11.0%	子ども達の手本となる大人。模倣となる人。
		親に代わって	23.2%	親に代わって子ども達と生活の一部を共にする。
		その他役割	2.4%	子どもの世界を広げる。子どもの作品を守る。
	専門職	専門職	2.4%	子どもの心身の発達、保護者支援・子育て支援の専門職。
		発達・資質の伸長	7.3%	子どもの内にある創造力や発想力を育む仕事。
		保育技術	6.1%	絵・歌や作りものが上手。運動が得意、体を動かす。
		遊びの能力	9.8%	発達にあった遊び内容をたくさん知っている。
		資質	13.4%	表現力豊かな存在。発達段階を理解している。
		性格・特性	13.4%	明るく機転が利く。母性が高い。ユーモアがある。
		保育士の喜び	4.9%	責任感があり、やりがいのある仕事。
	職域・保育士職	地域・連携	7.3%	地域と共に育む。各諸機関と連携を取りながら保育をする。
		労働特性	13.4%	給料安い。重労働。体力勝負。休日少ない。
		職員協力	3.7%	職員間の連携や関係性の重要さ。職員同士仲が良い。
その他保育士 その他職域		9.8% 2.4%	遊んでいるだけではない。女性の社会進出のために必要。 創造力を育てる場所。今変わろうとしている職業。	

表3 複数のイメージ内容を含む回答例

経験年数	回答例 (回答した保育士の経験年数)
1～2年	子どもの遊びを見守り安全に過ごせるようにする (1)
3～5年	子どもにとって信頼できる人、偏った見方をしない (4)
6～10年	子どもの成長・発達を見守る、援助する (10)
11年以上	子どもの興味関心を理解し、多様で継続的な体験を保障する役割 (17)

(3) 回答の多かった保育士イメージ

表2で示した回答イメージの内、回答件数の上位20位のイメージ内容について、回答件数、回答率、回答者の経験年数・ランク評価・強さ評価の平均値、及び件数とランク評価の平均値・強さ評価の平均値の順位についてまとめたのが表4である。

表4に基づいて、主分類及び副分類の回答比率を示したのが図2である。先に示した図1とほぼ同様の結果であるが、主分類内の「子どもの受け止め」と「保育」の占める割合が更に大きくなり、全体の3分の2以上を占めている。

表4 現役保育士における保育士イメージ (上位20位にランクされた内容)

主分類	副分類	内容	全回答 (N=82)								
			件数	回答率	平均値			順位			
					経験年数	ランク	強さ	件数	ランク	強さ	
子どもの受け止め	感情	愛情	23	28.0%	8.3	1.9	9.2	2	4	3	
		子ども好き	9	11.0%	8.0	2.6	9.0	19	16	6	
	感性	子どもと共に	17	20.7%	7.4	3.2	7.8	6	31	38	
		子どもへの共感	13	15.9%	8.2	3.0	7.8	10	27	38	
	態度	寄り添う	9	11.0%	5.8	2.0	8.4	19	5	24	
		見守る	19	23.2%	4.9	2.9	8.2	3	23	30	
一人一人 支える		13 9	15.9% 11.0%	5.1 9.4	2.3 3.4	8.8 8.5	10 19	11 34	12 16		
保育	目的	安心・信頼	24	29.3%	10.3	2.1	9.0	1	7	6	
		命を守る	14	17.1%	11.1	1.3	9.1	9	2	4	
		人格・人間基盤の形成	10	12.2%	6.8	2.2	9.0	16	9	6	
	子ども育成	子育て援助	10	12.2%	12.0	2.9	8.2	16	23	30	
		社会性・友人関係	16	19.5%	7.5	3.8	7.1	7	45	48	
保育内容	環境作り・環境整備	18	22.0%	11.2	3.5	8.3	5	35	26		
保護者	関係	安心・信頼	10	12.2%	9.1	3.0	8.2	16	27	30	
		保護者と共に	16	19.5%	9.0	2.6	8.1	7	16	35	
保育士	役割	憧れ・モデル	12	14.6%	6.3	2.7	8.5	12	18	16	
		お手本	9	11.0%	8.9	2.9	8.2	19	23	30	
		親に代わって	19	23.2%	9.1	2.8	8.3	3	21	26	
	専門職	資質	11	13.4%	12.3	3.2	8.5	13	31	16	
		性格・特性	11	13.4%	5.5	3.1	6.9	13	30	49	
	保育士職	労働特性	11	13.4%	9.7	3.5	8.5	13	35	16	

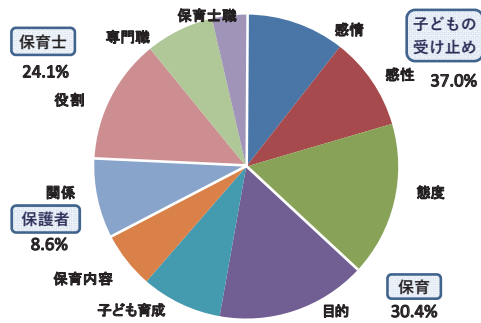


図2 上位にランクされた保育士イメージ内容の分布

(4) ランク評価と、イメージの強さ評価について

56のイメージ内容に対する、ランク評価の平均値の内、上位10位に位置するイメージ内容について、回答数、ランク評価及びイメージの強さ評価の平均値、及びそれぞれの順位についてまとめたのが表5である。

同じくイメージの強さ評価の内、上位10位に位置するイメージ内容について、表5と同様の項目についてまとめたのが表6である。

イメージ内容の回答は多岐にわたるので、それぞれの内容に対する回答数は少ないものも多いが、回答数の多いイメージ内容に対するランク評価・イメージの強さ評価は着目すべきであろう(表中で太字表記した内容)。

上記の視点に基づいて、回答数の多かった上位10位イメージ内容について、イメージの強さ評価とランク評価の分布を示したのが、表7である。表7から、評価が分散するイメージ内容と、比較的上位に凝集するイメージ内容が認められた。

表5 ランク上位の保育士イメージ内容

内容	回答数	平均		順位		
		ランク	強さ	回答数	ランク	強さ
専門職	2	1.0	6.5	52	1	53
愛着	3	1.3	9.0	47	2	6
命を守る	14	1.3	9.1	9	2	4
愛情	23	1.9	9.2	2	4	3
寄り添う	9	2.0	8.4	19	5	24
安全	7	2.0	8.6	26	5	15
子ども尊重・子ども第一	7	2.1	8.7	26	7	13
安心・信頼	24	2.1	9.0	1	7	6
子ども一番・ありのままに	5	2.2	9.6	39	9	2
人格・人間基盤の形成	10	2.2	9.0	16	9	6

表6 強さ上位の保育士イメージ内容

内容	回答数	平均		順位		
		ランク	強さ	回答数	ランク	強さ
遊び・保育を楽しむ	3	2.7	10.0	47	18	1
子ども一番・ありのままに	5	2.2	9.6	39	9	2
愛情	23	1.9	9.2	2	4	3
優しい・明るい	7	2.3	9.1	26	11	4
命を守る	14	1.3	9.1	9	2	4
愛着	3	1.3	9.0	47	2	6
子ども好き	9	2.6	9.0	19	16	6
安心・信頼	24	2.1	9.0	1	7	6
人格・人間基盤の形成	10	2.2	9.0	16	9	6
活動保障	3	4.3	9.0	47	53	6

(5) 回答内容の経験年数による推移

全体回答数で上位20位を占める保育士イメージ内容について、経験年数別に回答率と順位を掲載し、経験年数による回答内容の推移をまとめたのが表8である。

また各経験年数区分において、回答率で上位10位に入るイメージ内容で、表8に現れない内容について、抜粋してまとめたのが表9である。表8・表9から、各経験年数区分において回答率で上位を占めるイメージ内容を読み取る

表7 回答数の多かったイメージ内容における、イメージの強さとランク評価の分布

順位	イメージ内容	イメージの強さ										ランク				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5
1	安心・信頼	0	0	0	0	0	0	3	5	5	11	11	4	6	2	1
2	愛情	0	0	0	0	0	0	0	6	6	11	12	4	5	2	0
3	見守る	0	0	0	0	0	4	2	5	3	5	4	5	4	1	5
3	親代わり	0	0	0	0	1	1	0	11	2	4	4	5	2	5	2
5	環境作り・環境整備	0	0	0	0	0	2	3	5	3	5	1	3	4	6	4
6	子どもと共に	0	0	0	1	2	1	2	3	5	3	2	4	4	3	4
7	社会性・友人関係	0	0	0	1	2	2	2	6	1	1	0	3	3	4	6
7	保護者と共に	0	0	0	0	1	2	0	5	7	1	4	4	4	2	2
9	命を守る	0	0	0	1	0	0	0	2	3	8	12	0	2	0	0
10	子どもへの共感	0	0	0	1	1	1	0	5	3	2	2	3	2	5	1
10	一人一人	0	0	0	0	0	1	0	4	3	5	5	1	6	0	1
	合計	0	0	0	4	7	14	12	57	41	56	57	36	42	30	26

表8 上位20位の回答内容の経験年数による推移

主分類	副分類	内容	全回答 (N=82)		経験年数							
					1～2年(N=18)		3～5年(N=26)		6～10年(N=13)		11年以上(N=25)	
			回答率	順位	回答率	順位	回答率	順位	回答率	順位	回答率	順位
子どもの受け止め	感情	愛情	28.0%	2	22.2%	5	30.8%	2	46.2%	1	20.0%	6
		子ども好き	11.0%	19	5.6%	29	11.5%	34	15.4%	39	12.0%	35
	感性	子どもと共に	20.7%	6	22.2%	5	15.4%	11	23.1%	5	24.0%	3
		子どもへの共感	15.9%	10	27.8%	2	11.5%	17	7.7%	23	16.0%	8
	態度	寄り添う	11.0%	19	22.2%	5	3.8%	34	15.4%	12	8.0%	24
		見守る	23.2%	3	44.4%	1	23.1%	5	23.1%	5	8.0%	24
一人一人		15.9%	10	22.2%	5	23.1%	5	7.7%	23	8.0%	24	
支える		11.0%	19	11.1%	18	15.4%	11	7.7%	23	8.0%	24	
保育	目的	安心・信頼	29.3%	1	27.8%	2	26.9%	4	23.1%	5	36.0%	1
		命を守る	17.1%	9	16.7%	11	15.4%	11	7.7%	23	24.0%	3
		人格・人間基盤の形成	12.2%	16	11.1%	18	11.5%	17	23.1%	5	8.0%	24
	子ども育成	子育て援助	12.2%	16	5.6%	29	11.5%	17	15.4%	12	16.0%	8
	社会性・友人関係	19.5%	7	11.1%	18	34.6%	1	15.4%	12	12.0%	15	
	保育内容	環境作り・環境整備	22.0%	5	16.7%	11	19.2%	8	15.4%	12	32.0%	2
保護者	関係	安心・信頼	12.2%	16	11.1%	18	7.7%	24	23.1%	5	12.0%	15
		保護者と共に	19.5%	7	11.1%	18	23.1%	5	30.8%	3	16.0%	8
保育士	役割	憧れ・モデル	14.6%	12	16.7%	11	19.2%	8	7.7%	23	12.0%	15
		お手本	11.0%	19	11.1%	18	3.8%	34	23.1%	5	12.0%	15
		親に代わって	23.2%	3	27.8%	2	11.5%	17	38.5%	2	24.0%	3
	専門職	資質	13.4%	13	0.0%	48	15.4%	11	15.4%	12	20.0%	6
		性格・特性	13.4%	13	5.6%	29	30.8%	2	0.0%	39	8.0%	24
	保育士職	労働特性	13.4%	13	0.0%	48	15.4%	11	23.1%	5	16.0%	8

表9 表8に現れない経験年数別上位内容

経験年数	内容	回答率	順位
1～2年	優しい・明るい	22.2%	5
	生活習慣・生きる力	22.2%	5
3～5年	地域・連携	19.2%	8
6～10年	その他保育士	30.8%	3
11年以上	肯定的関わり	16.0%	8
	子ども尊重・子ども第一	16.0%	8
	保護者支援	16.0%	8

ことができる。

5 考察

(1) 現役保育士における保育士イメージ

調査結果をKJ法で分類すると、表2に示した56のイメージ内容を抽出することができた。それぞれの保育士が思い描く保育士イメージは幅広い内容であるが、主分類・副分類に集約すると、現役保育士全体の保育士イメージが見えてくる。記述された保育士イメージは、「子どもの受け止め」「保育」「保護者」「保育士」という4つの主分類のいずれかに分類することができた。また、4つの主分類の下位分類として、11の副分類を抽出した。抽出されたイメージ構造について、主分類項目をキーにしなごらまご俯瞰してみよう。

主分類「子どもの受け止め」は、「(子どもへの保育士の)感情」「(子どもについての保育士の)感性」「(子どもに対する保育士の直接的な)態度」の3つの異なる副イメージ方向に区分される。この主分類は、図1に示したように全解答数の33%を占める。保育士として、保育する子どもへの気持ちの傾斜、保育する子どもの受け止め態度、保育実践における子どもへの保育士としての態度に、自らの職である保育士についてのイメージを形成し、子ども中心のイメージが主となる。当たり前の結果であろうが、保育士を営む大きな立脚点が、ここに示されて

いるのであろう。副分類「感情」「感性」「態度」の、この主分類内での回答比率は、26.9%・30.8%・42.3%となる。子どもへの思いをベースとしながら、単に「子どもがかわいい」といった感情ではなく、保育実践者としてどのように子どもに向かっていくのかという方向にイメージ内容が傾斜している。

主分類「保育」は、「(保育を実践する)目的」「(保育実践の趣旨としての)子ども育成」「(保育実践において具体的に扱う)保育内容」の3つの異なる副イメージ方向に区分される。この分類は、職制としての「保育士の特性」に関する内容ではなく、自らが保育士として営む保育そのものに関するイメージである。この主分類は全解答数の30.0%を占め、先に述べた「子どもの受け止め」と共に30%を超える高い比率となる。保育士を営むもう一つの大きな立脚点がこのイメージ内容に依っている。この主分類内における副分類である「目的」「子ども育成」「保育内容」の回答比率は、44.0%・29.8%・26.2%となる。現役保育士として、何のために保育実践をするのかという「目的」が副分類において第1位となるのは、現役保育士が描く保育士イメージとして当然の結果であろう。

職制としての「保育士の特性」に関するイメージである主分類「保育士」は、「(保育実践する保育士の)役割」「(保育実践する保育士は)専門職(である)」「(保育を担う保育士の)職域・保育士職(が有する特性)」の3つの異なる副イメージ方向に区分される。プロフェッショナルな専門職としての保育士イメージは、この主分類として表現されると思われたが、この主分類への回答は全解答数の25.5%であり、4つの主分類中の第3位となり、必ずしも高比率にはならなかった。従前の保育士の専門性に関する研究において、保育士の専門性を構成する内容としてリストアップされる「保育内容」「保護

者支援」「幼児に関する専門知見」などについては、現役保育士による保育士イメージの記述においてはそれほど優勢に出てこない。この主分類内における「役割」「専門職」「職域・保育士職」の回答比率は、35.3%・39.5%・25.2%となる。「役割」の中に、「子どもの憧れ・モデル」「子どものお手本」という回答があるのは興味深い。自らの職業イメージである保育士職に関するイメージも子ども中心に記述される。

主分類「保護者」は、「(子どもを預かる保育者が、その保護者に対する良好な人間関係)」「(子育て支援者である保育士による保護者に対する)支援」の2つの異なる副イメージ方向に区分される。この主分類への回答は全回答数の11.5%であり、他の3つの主分類に比べてかなり低い比率となる。この主分類内における「関係」「支援」の回答比率は、61.1%・38.9%となる。特に「支援」に関する回答件数は21件であり、回答者の人数が82名であることを勘案すると、かなり低い比率であると言えよう。保育士イメージには、保護者相談・保護者支援というイメージもあるが、今般の回答内容によれば、保育士は保護者に安心感を与え、保護者の信頼を得ることで、「保護者と共に、子どもを育む」というイメージが強く、保育士が行う「保護者支援・子育て支援」という行為は、カウンセリング的なイメージではなく、あるいは対人援助専門職に見られる職業イメージではなく、子どもと共に日々の生活を共有するという事が基盤となった上での保護者対応なのであろう。

現役保育士は、自らの職(職種)に対して以上のようなイメージを持っており、これらが、「保育士としてのアイデンティティ」形成における立脚点の総和となっている。

(2) 上位にランクされた保育士イメージ

次に、現役保育士が描く保育士イメージの代表像・典型像・定型像を知るために、回答数で上位20位にランクされるイメージ内容について考察する(表4)。主分類・副分類の分布を示した図2を見ると、「子どもの受け止め」「保育」「保護者」「保育士」の比率は、37.0%・30.4%・8.6%・24.1%となり、4つの主分類の分布傾向は回答全体の結果を示した図1と類似するが、(1)で述べた「子どもの受け止め」「保育」が高比率に分布するイメージ特性がより強調された結果となっている。また副分類に着目すると、「主分類・子どもの受け止めにおける『態度』」「主分類・保育における『目的』」の比率が更に大きくなり、「保護者・支援」については上位ランキングから脱落している。これらも、(1)で述べた現役保育士の保育士イメージの特徴が強調された結果である。

表4で示した上位にランクされる保育士イメージに着目すると、回答率1位は「安心・信頼(保育・目的)」、2位は「愛情(子ども・感情)」、3位は「見守る(子ども・態度)」「親に代わって(保育士・役割)」である(括弧内は主分類・副分類)。抽出された主・副分類区分が分散している点が興味深いのが、これらのイメージ内容をつなぎあわせて文章化すると以下のような記述になる。

「保育士は、子どもが安心・信頼できるように、子どもに愛情を注ぎ、親に代わって子どもを見守る(育む)」

調査結果を強調させてあえて言い切るならば、「現役保育士自身がイメージする保育士」はこのような記述となり、この表現は保育士に関する簡潔な定義にも通じよう。現役保育士が感じ取ったこのような保育士イメージの基調は、筆者がかつて行ったベテラン保育士へのインタビュー調査の中でも活き活きと感じ取るこ

とができた(柴田, 2014)。

またこの記述に見られるような保育士の存在は、子どもの側から見ると愛着が形成できるための大人の側の基本要件であろう。後に考察する経験年数区分毎のイメージ内容を示した表8を見ると、ここで抽出された1位～3位の内の「安心・信頼」「愛情」は、経験年数に関係なく上位にランクされるイメージ内容である。現役保育士においては、子どもの最善の利益を確保する専門職としての保育士の基本スタンスがこれらのイメージであり、保育士のアイデンティティを形成する際の核になるイメージ内容であると推察される。

現役保育士が記述するイメージ内容は、子どもとの人間関係に関する内容が高位となり(転じて、保護者との人間関係にもつながる)、この結果は保育者のアイデンティティを保育内容「人間関係」に関する保育者効力感との関連で検討した西山(2006)の研究方向とも合致する。また、幼児の人間関係の発達変化に良くも悪くも強く反応して子どもを受け止めようとする保育士の職業特性を示唆するようにも推察される(柴田, 2018)。

(3) イメージの強さ、イメージのランク

評価結果を表5～表7にまとめている。まず、10段階評価で評価を求めたイメージの強さに関しては、概して強い評価をつけることが多かったと思われる。このことは、現役保育士が記述する保育士イメージの内容は、回答者(現役保育士)の中で明確に意識されている(腑に落ちている)ことの証左ではないかと推察された。

イメージ内容が多岐にわたるので、イメージの強さやランク付けは各イメージ内容によってまちまちであるが、表5・表6に示した回答数の多いイメージ内容は着目すべきである(「命

を守る」「愛情」「安心・信頼」「人格・人間基盤の形成」)。また、これらのイメージ内容は、表7に見られるように、イメージの強さの分布は高位評価方向に凝集されており、保育士イメージを構成する重要なイメージ内容となるのであろう。

(4) 経験年数によるイメージ内容の推移

上位20位に位置するイメージ内容について、4つの経験年数区分別にまとめたのが表8である。経験年数区分については、秋田(2000, 2001)が紹介した「保育者の発達段階モデル」を参考に策定しており、本研究で用いた経験年数区分は、秋田の段階1～段階4に概ね対応している。

表8に見られるように、経験年数によって回答内容は変化する。また、全体として上位20位にはランクされないが、経験年数区分内で上位にランクされるイメージ内容は着目すべきであり、その内容について表9に示している。これらは経験年数に従って変化するイメージ内容の特徴をよく表している。

経験年数によるイメージ内容の推移について考察するために、調査結果から経験年数区分別に、回答された全イメージ内容に対する4つの主分類の分布比率を計算した(表10)。また、より典型的なイメージ内容の推移傾向を考察するために、回答されたイメージ内容の内、各経験年数区分における上位10位に含まれる回答のみについて、経験年数区分別に、4つの主分類の分布比率を計算した(表11)。

表10・表11から以下のことが読み取れる。

- ① 「子どもの受け止め」の比率は、経験年数が長じると共に減少する。
- ② 「保護者」「保育士」の比率は、経験年数6～10年に向けて増加するが、11年以上ではやや減少する。

表10 経験年数別にみたイメージ内容の分布（全回答）

主分類	経験年数			
	1～2年	3～5年	6～10年	11年以上
子どもの受け止め	41.3%	32.4%	30.8%	28.9%
保育	30.3%	29.1%	20.5%	36.3%
保護者	9.2%	11.5%	15.4%	11.1%
保育士	19.3%	27.0%	33.3%	23.7%

表11 経験年数別にみたイメージ内容の分布（上位10位）

主分類	経験年数			
	1～2年	3～5年	6～10年	11年以上
子どもの受け止め	70.2%	30.8%	30.0%	19.4%
保育	19.1%	32.3%	15.0%	46.3%
保護者	0.0%	9.2%	17.5%	11.9%
保育士	10.6%	27.7%	37.5%	22.4%

- ③ 「保育」については、6～10年で一旦減少するが、11年以上では最高比率に転じる。
- ④ 上位10位以内のイメージ内容に限ると（表11）、①～③の傾向は更に増幅される。
- ⑤ 表11では、経験年数1～2年において、「子どもの受け止め」が70%を占める。
- ⑥ 同じく3～5年では、「子どもの受け止め」「保育」がほぼ同率となり、「保育」がやや優勢になる。「保育士」に関しても27.7%であり、「子どもの受け止め」「保育」に近い比率となる。
- ⑦ 6～10年では、「保育士」が37.5%と第一位になる。
- ⑧ 11年以上では、これまでの傾向とは異なり、「保育」が46.3%と、他を大きく凌駕する。各経験年数区分毎の保育士イメージ内容について、上位10位にランクされた回答内容を主分類区分別に示したのが図3である。図3における各イメージ内容を図示した各図の縦幅は、全回答量に対する比率を示している。10位が

同率にランクされたため、6～10年では11項目、11年以上では14項目となった。図中の点線は副分類区分を示している。また図中のパーセント表示は、図示した回答内容への回答量の全回答量に対する比率を経験年数区分毎に示している。

図3から、以下のようなことが読み取れる。

- ① 保育士は現場経験を経る中で、保育実践における着目点や実践内容などを変化・発展させていながら、自らの職に対して描くイメージ（＝保育士としてのアイデンティティ）を変化させていく。
- ② 経験年数1～2年の保育士：目前の「子どもの受け止め」のみにもっばら気持ちが動く。
- ③ 経験年数3～5年の保育士：自分＝保育を行う者としての意識や行為が広がっていく（主分類の「保育」「保護者」「保育士」の幅が広がる）。「保育士は、子どもにとってあこがれ・モデルである」というイメージ内容が計上される所などは興味深い。
- ④ 経験年数6～10年の保育士：3～5年に比べて、保育士としての職業意識が深まってくる（主分類の「保育士」の幅が広がってくる）。図3に見られるように、これまでの経験年数区分に比べて図全体の縦幅が広がっており、10位以内の内容が全体の51.3%になる。保育士としての職業内容がキャリアによって凝縮されてくるのであろう。主分類「保育士」の比率が4つの経験区分の中で一番大きくなるのも特徴である。
- ⑤ 経験年数11年以上：6～10年に比べて、保育士イメージが客観化・相対化されてくる。主分類「子どもの受け止め」では「子どもへの共感」「肯定的関わり」、主分類「保育」では「子ども尊重」「命を守る」「環境整備」（10年未満の保育士が持つイメージとは「環境整備」の内容が異なるのであろうと想像され

主分類	1～2年(N=18) 10項目 43.1%	3～5年(N=26) 10項目 43.9%	6～10年(N=13) 11項目 51.3%	11年以上(N=25) 14項目 54.1%	主分類
子どもの受け止め	愛情	愛情	愛情	愛情	子どもの受け止め
	優しい・明るい	見守る	子どもと共に	子どもと共に	
	子どもと共に	一人一人	見守る	子どもへの共感	
	子どもへの共感	安心・信頼	安心・信頼	肯定的関わり	
	寄り添う	社会性・友人関係	人間基盤の形成	子ども尊重	
	見守る	環境整備	安心・信頼(保護者)	安心・信頼	
	一人一人	保護者と共に	保護者と共に	命を守る	
保育	安心・信頼	憧れ・モデル	子どものお手本	子育て援助	保育
	生活習慣・生きる力	保育士の性格・特性	親に代わって	環境整備	
保育士	親に代わって	地域・連携	労働特性	保護者と共に	保護者
			その他保育士	保護者支援	
				親に代わって	
				保育士の資質	保育士
				労働特性	

図3 上位10位の回答内容の経験年数による推移

注記 パーセント値は、各勤務経験年数区分の全回答数に対する回答量の比率
 6～10年では同率5位が6項目、11年以上では同率8位が7項目ある

る)、主分類「保護者」では「保護者支援」、主分類「保育士」では「保育士の資質」というように、イメージ内容においてより積極的かつ客観的な、より深まった価値観がうまれている。これらの内容が、保育士としての醸成された専門性を構成するものだと考えられる。また、それらに対する意識化が始まっており、保育士としての揺るぎないアイデンティティを形成するのであろう。KJ法によって分類されたほぼ全ての副分類項目がバランスよく図中に配置されるのもこの経験年数区

分である。

⑥ 同じ主分類項目であっても、記載されるイメージ内容の変遷には着目すべきである。しかし他方で、「愛情」「子どもと共に」「安心・信頼」「親に代わって」といったイメージ内容は、経験年数に関わりなくイメージされる内容であり、保育士自身が保育士に対して描くイメージの基調であると考えられる。

結果の(2)で示した複数のイメージ内容を含む回答率を見ると、経験年数10年までの保育士では全回答数の5分の1近くを占め、自ら

の職である保育士に関してあれこれ様々な思いが重なって湧出するためだろうかと推測された。このことは保育実践者の主観として了解できるが、11年以降ではその比率は10.7%と低減する。これは、保育士として「このことが大切である」ということを具体的かつ簡潔に選別して述べることができるようになったためであろうか。これらの点も保育士としての成熟を示しているのかもしれない。また、イメージ記述の例として、表3に示した複数イメージを含む回答例を見ると、記述されたイメージは経験年数と共に深化していることが読み取れる。

図3に見られるプロセスは、秋田(2000)が示した保育士の成長過程を形成する具体的な内容を示していると思われた。また経験年数11年以上の保育士イメージは、保育実践者としてのとりあえずの到達点を示しているように推察され、このような保育士自身による実感が、到達された保育士のアイデンティティに対する立脚点となるのであろう。図3に示した保育士イメージの成長過程と併せて、このようなイメージに基づくよりよい保育実践を営めるための知見や技術とは何なのか、このような保育士イメージをよりよく成立させる為に必要なことは何なのかを、保育士の成長過程に併せて研究することによってこそ、保育現場に受け入れられる保育士の専門性研究になるのだと考える。

6 おわりに

「保育士の専門性の研究」という領域は、「専門性」という言葉を冠におけば、あまりにもどのような事柄に対しても適用されすぎている感を否めない。小笠原他(2017)が指摘するように、それらの研究成果は現場実態にそぐわず、日々保育実践を営む現役保育士が蚊帳の外に置かれてしまうことを危惧する。保育士自身によ

る、保育士に関するイメージ記述に対する分析研究は、分析内容や分析対象はあくまでも主観的領域に属するのだが、保育実践当事者から発せられた内容を詳細に分析・研究することで、研究対象のリアリティを損なわずに取り扱うことができ、そこから得られた知見は保育実践現場に役立つと考える。本研究が、現場への橋渡しに少しでも貢献することができれば、望外の喜びである。

本調査は特定法人の保育士への調査であり、調査結果は特定法人の子ども観・保育観の反映かもしれない。また、調査数も十分な数を得られていない。男性保育士に特有な保育士イメージが存在すると思われたが本研究で取り扱えなかった。更なる調査・研究が今後の課題である。

謝辞

本研究を実施するにあたり、宇治福祉園の先生方にアンケート調査のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。また、KJ法実施に当たってお手伝いいただいた京都文教大学非常勤講師の後藤紀子氏と、執筆段階で貴重なご助言をいただいた京都文教大学非常勤講師の大森弘子氏に深謝いたします。

本研究の一部を、日本保育学会第72回大会で発表した。

引用文献

- ・秋田喜代美. (2000). 保育者のライフステージと危機. 発達 83号 (pp.48-52). ミネルヴァ書房.
- ・秋田喜代美. (2001). 保育者のアイデンティティ. 森上史朗・岸井慶子編. 保育者論の探求 (pp.109-130). ミネルヴァ書房.
- ・秋田喜代美. (2013). 総論 保育者の専門性の探究.

- 発達 134 号 (pp.14-21). ミネルヴァ書房.
- ・天野珠路. (2013). 地域の子育て支援・保護者支援の専門性 - 地域の未来をつくる. 発達 134 号 (pp.34-39). ミネルヴァ書房.
 - ・Erikson,EH, (1959). Identity and the Life Cycle. . International Universities Press.
小此木啓吾訳編. (1973). 『自我同一性』. 誠信書房.
 - ・廣内厚士. (2013). 人事交流教員からみる保育者の専門性. 発達 134 号 (pp.40-45). ミネルヴァ書房.
 - ・片山喜章. (2013). 保育者を支援するネットワーク - 「公開保育 (みてみて保育)」の新たな取り組み形態と多様性の理解. 発達 134 号 (pp.53-58). ミネルヴァ書房.
 - ・神長美津子. (2015). 1 展望 専門職としての保育者. 保育学研究第 53 巻第 1 号 (pp.94-103).
 - ・川喜田二郎. (1967). 発想法 - 創造性開発のために. 中公新書 136. 中央公論新社.
 - ・森上史朗. (2000). 保育者の専門性・保育者の成長を問う. 発達 83 号 (pp.68-74). ミネルヴァ書房.
 - ・中坪史典. (2013). 保育者の専門性を高める園内研修 - 多様な感情交流の場のデザイン. 発達 134 号 (pp.46-52). ミネルヴァ書房.
 - ・西山修. (2006). 子どもの社会性を育むことへの保育者効力感とアイデンティティ地位との関係. 子ども社会研究 12 号. (pp.57-69).
 - ・野口隆子. (2013). 保育者の専門性とライフコース - 語りの中の“保育者としての私”. 発達 134 号 (pp.59-64). ミネルヴァ書房.
 - ・小笠原文孝他. (2017). 保育現場の視点から捉えた「保育士の専門性」議論の再考. 保育科学研究第 8 巻. (pp.84-92).
 - ・柴田長生. (2014). 対人援助職としての保育士の可能性 3 - 保育所での保育士業務から見えるもの -. 心理社会的支援研究第 3 巻. (pp.97-117). 京都文教大学.
 - ・柴田長生. (2018). 幼児期の人間関係形成過程に関する一考察 - 「巣と群れ」という視点から -. 心理社会的支援研究第 8 巻. (pp.3-15). 京都文教大学.
 - ・戸田雅美. (2013). 「子どもが自ら遊ぶ中で育つこと」から見る保育者の専門性. 発達 134 号 (pp.22-27). ミネルヴァ書房.
 - ・上田敏文. (2013). 保育環境の中に見る保育者の専門性. 発達 134 号 (pp.28-33). ミネルヴァ書房.
 - ・Vander Ven. K. (1988). Pathways to professional effectiveness for early childhood educators. In B. Spodek, O. N. Saracho & D. Peterd (Eds.). Professionalism and the early childhood practitioner. Teachers College Press.
 - ・全国保育士養成協議会. (2013). 「保育者の専門性についての調査」: 保育者の成長と専門性の獲得. 平成 24 年度専門委員会課題研究報告書, 1. (pp.1-25). 全国保育士養成協議会.
 - ・全国保育士養成協議会. (2014). 「保育者の専門性についての調査」: 養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み. 平成 25 年度専門委員会課題研究報告書, 2. (pp.26-130). 全国保育士養成協議会.

Abstract

The Various Child-Care Provider Images of Current Child-Care Providers

Chosei SHIBATA

The various self-images of a child-care provider for 82 current child-care providers were studied. The child-care images were classified using “KJ’s method” and 56 various child-care provider images were found, which were classified into four main categories and eleven sub-categories. The percentages listed below are the ratios of a specific category to all categories.

Category 1: the custody of a child (33.2%), including sub-categories of love, feelings about a child, and compatibility.

Category 2: The child-care (30.0%), including the sub-categories of purpose of child-care, up-bringing of a child, and nursing.

Category 3: the protector (11.5%), including the sub-categories of relationship, and protector support.

Category 4: the child-care provider (25.3%), including characteristics of the role, child-care profession, child-provider jobs and workplace.

The years of experience change the self-image of a current child-care provider. The child-care provider with 1-2 years of experience has several self-images, and the category 1 answer accounts for 70% of the total. The child-care provider with 3-5 years of experience has a child-care self-image where their answer is about equal for category 1, category 2, and category 3. The child-care provider with 6-10 years of experience has a deeper job consciousness, and the category 4 answer pre-dominates. The child-care provider with 11 or more years of experience has a self-image formed by externalization and relativization, and their answer is a balance of the categories.

The change in self-image follows the growth of the child-care provider.

Keywords: child-care provider image, classification, growth of the child-care provider